

論文審査結果報告書

論文提出者氏名 久保田 有香

学位論文題目 高齢者における舌尖部舌痛症のリスク因子に関する
研究—下顎前歯部切縁形態に焦点をあてて—

診査委員（主査） 安細 敏弘 印

（副査） 吉岡 泉 印

（副査） 稲永 清敏 印

論文審査結果の要旨

舌痛症は舌に器質的変化がないにもかかわらず舌の痛みを訴える病態で、高齢者や更年期女性などに多くみられることが知られている。本研究では、舌痛症のうちとくに舌尖部に舌痛を訴えるケースにフォーカスをあて、そのリスク因子を検討する目的で、口腔環境、生活環境などの項目を含む質問紙調査にあわせて、下顎前歯部切縁形態に着目した研究を行った。対象は、本学附属病院の外来患者30名とし、初診時に舌痛を訴えた15名（平均年齢73.1歳）とコントロールしてメンテナンス患者15名（平均年齢71.2歳）について、以下の調査内容に関し両群間で比較検討を行った。調査内容は、独自に作成した43項目からなる自記式調査票による質問紙調査のほか、口腔乾燥状態の評価（唾液湿潤度検査、口腔水分計による検査および唾液分泌検査）、さらに下顎前歯部形態の計測であった。下顎前歯部形態については咬合平面に対する臨床的歯冠の傾き、咬合平面からみた前歯部切縁のなす角度、前歯部舌側切縁部の鋭利度をみた。

その結果、舌尖部舌痛のある群では精神安定剤の服用があること、前傾姿勢の傾向があること、舌背部粘膜の唾液湿潤度が低いこと、および下顎前歯部舌側切縁部の鋭利度が高いこと、などが認められ、両群間で有意差が認められた。これらのことから、舌尖部舌痛は前歯部の鋭利な舌側切縁形態が関連しており、これに口腔乾燥や前傾姿勢などの因子が加わることで症状が惹起される可能性がある」と結論づけている。

一方、得られた結論と器質的変化なしとする舌痛症の定義との齟齬、対象者のリクルートの手法、自記式質問紙や計測値の信頼性・再現性などについて指摘がなされたが、これまでアプローチされてこなかった舌尖部舌痛と前歯部切縁形態との関連性について有益なデータを出したことは評価でき、またこれらの研究分野に関して十分な知識を有していたことから審査委員会では学位論文として価値あるものと判断した。

